

# 高校から大学への移行に関する一考察

学生・教員・大学組織の三者への提言

キャロル・マッチ\*

訳 中島英博\*\*

---

## <要 旨>

多くの研究において、大学の初年次は高校生から大学生への移行期であるととらえられている。この移行を確実に進めるためには、学生をとりまく教員・職員などのスタッフや大学組織が彼らをサポートする必要があり、また学生自身も自ら適応していく必要がある。Vincent Tintoによれば、移行期における学生は、独立(separation)、移行(transition)、適応(incorporation)という三つの段階を乗り越えなければならないという。本稿では、学生の移行に関する欧米の研究の整理を通じて、学生、教員、大学組織への提言についてまとめる。

---

## 1. はじめに

高校期から大学期への移行は、学生のキャリアにおいて重要な一步である。この期の移行は、他者に依存した学習者から自立した学習者への移行を意味する。すなわち、高校期では決められた時間割と学習進度をきめ細かく把握された環境で学習するのに対し、大学期では学習時間の確保とその中で何を学ぶかを、主体的かつ自らの責任で行う学習への移行である。

本稿では高校期から大学期の移行に関する欧米の研究を概観し、学生、教員、大学組織へ向けて示された提言についてまとめる。学生側の適応が重要であることは多くの文献で指摘されていることであるが、同時に教員、そして大学組織による学生支援の必要性も指摘されている。すなわち、教

---

\*クライストチャーチ教育大学・教授

\*\*名古屋大学高等教育研究センター・助手

員は、学生の高校期における学習経験について十分に理解し、彼らを各専門領域における学習コミュニティの一員となれるように支援を行う必要がある。また、大学は組織としてそれらの活動を支えるために、柔軟な組織を作り、適切なプログラムの提供を行う必要がある。

大学の教員は学術的な側面ばかりを追求するようだが、学生が自立した学習と複眼的な思考を行うためのスキルを獲得し、新たな目標へ自信を持って取り組めるようになれば、学生はより高い学習成果を示すということが、多くの文献によって指摘されている。こうしたスキルは、目的を明確に示し、実際の学習の中で学ぶことが最良であり、獲得できるものであるから、教員は専門領域の指導の中でこうしたスキルを指導することが重要である。

## 2. 移行期に関する研究の系譜

移行(transition)は、変化(change)とは異なるものである。変化は外面的なもので目に見えるものであるが、移行は内面的なもので観察しにくいものである。移行は、大きな生活の変化に直面したときに心の中で進行するプロセスである<sup>1)</sup>。

先行研究では、大学の初年次こそが移行期であるととらえている。中でもTintoは、この移行期を大人への通過儀礼ととらえて、人類学的な見地からモデルを示している<sup>2)</sup>。Tintoのモデルによれば、移行期における学生は、独立(separation)、移行(transition)、適応(incorporation)という三つの段階を乗り越えなければならない。そして、この移行を確実に行うためには、学生側からの適応と、教員側からのサポート、および大学側の組織的サポートという双方のアプローチが不可欠である。

Tinto(米国・シラキュース大学)は、学生の移行に関する研究、とりわけ学生のリテンションに関する研究で著名な研究者である。Tintoは1975年に発表した論文の中で、学生の中退を防ぐ上で重要な二つの要因は、学習面の統合と社会面の統合であると強調している<sup>3)</sup>。長年の研究の中では、次のような結論を示している。

要するに学生は自分自身の学習に高い期待を抱き、必要な学問的・社会的サポートを受け、他の学生や教員とともに学習に積極的な参加

ができていることを感じられるならば大学で学び続けるだろう<sup>4)</sup>。

Tintoは、他にも学習上の障害(学習スキルの不十分さや学習態度の悪さ)、適応上の障害、目標の欠落、将来の不確実性、他者との関わり合いの問題、経済的な問題、大学での違和感や孤立なども中退の原因となり得るが、こうした問題を解決する糸口は、全て初年次における教育にあるということが、その後の研究で明らかになったと述べている<sup>5)</sup>。

加えて、いくつかの大学で実施されたサマープログラム、移行プログラム、初年次導入セミナー、学習コミュニティづくり、学習支援プログラムなどを評価しながらも、次のような問題点も指摘している<sup>6)</sup>。

近年、様々な実践プログラムが進められているが、その多くは学生が孤立しており、他の学生の学習と関わり合う経験がプログラムから得られない。すなわち、多くの学生は未だ個人の成果を問われる学習環境に置かれたままである。彼らの受ける大学教育は、教員の語りが主なもので学生の積極的な参加がほとんどない「スポーツ観戦型」である<sup>7)</sup>。

Tintoの一連の研究を支持しながら、そのモデルに沿って新たな理論を展開したのが、Draper(グラスゴー大学)である<sup>8)</sup>。Draperは、社会関係資本やハピトゥスを通じて統合の概念を拡張させたBourdieuの考え方を取り入れた研究であるBraxtonやThomasの研究を手掛かりとしている<sup>9)</sup>。Draperによれば、統合の問題は内面的な統合と外面的な統合の二つの観点から論じられる。ここでいう統合とは、学生自身が学生生活にいかうまく適応していくかということの意味する。内面的な統合は学生自身が大学生活をどのように感じるか、外面的な統合は他者が学生の大学生活をどのように見るかという面を指す。Tintoは学生生活には学問的な面と社会的な面の二つの側面があることを指摘したが、Draperによれば、学問的な面とは学習に関することで学生生活に不可欠なもの、社会的な面とは大学の内外で関わり合いを持つ集団での適応に関することである<sup>10)</sup>。

これに加えて、目標のすりあわせ、目標へ到達するための方法、目標到達を評価する方法には複雑な要因が絡み合っており、それぞれに固有の要因と外来的な要因があるとも指摘している。しかしながら総じて言えば、75年のTintoのモデルに関するDraperの適用は、原著の精神と主張にきわ

めて忠実であるといえる。すなわち、統合とは環境への適応であり、それは一方が他方へ歩み寄る適応でなく、双方が互いに近づくものであるという概念である<sup>11)</sup>。このことは、移行を行うのは学生だけではなく教員や大学組織にとっても必要であることを意味している。

Eriksen and Strommerは、学生の資質や学習態度、学生が大学に対して持つ期待、学生に必要な適応、移行の支援における教員の役割などに関する重要性を指摘した研究を行っている。Eriksen and Strommerによれば、移行期の本質を理解するには、学生が受けてきた高校教育についてまず知らなければならないという<sup>12)</sup>。

学生への教育方法の改善のためには、初年次学生について正確に理解する必要がある。すなわち、大学は、彼らがどのような学校から来ているか、どのような授業を受けてきたか、どのような資質を持っているのか、どのような目標や期待を抱いているのかについて、正確に把握しなければならない<sup>13)</sup>。

Eriksen and Strommerは、米国においても初年次生が大学へ寄せる関心は薄くなっており、過去の学生と比べて修学が困難になっていると指摘している。この要因には様々なものが考えられるが、家族構成の変化を含む社会構造の変化、学生のレジャー志向、高校課程での不十分な修業、アルバイト時間の増加などがあるだろう。中でも彼らは、高校での生活習慣には時間を管理するという面が欠落している点を指摘する。

高校での生活は、時間の変化がほとんどない生活である。日々の授業は時間割表で決められ、体育や昼食などを除けば始業も終業もチャイムの鳴る通りに進む。こうした生活に慣れ親しんだ新入生にとって、比較的自由な大学生生活に直面すると大きな不安を覚えるものだろう<sup>14)</sup>。

現在の新入生は、進学目的、大学生活への期待、学生の資質や生活態度などが親の世代と著しく異なるものの、彼らの基本的な目標は学問的な成就と社会的な成功であると指摘している。すなわち、学生は、将来の職業に向けた準備や、実社会で成功した社会人となるために必要な学習に対する支援を望んでいるのである<sup>15)</sup>。また、学生の期待と彼らが直面する現実

のギャップの大きさを指摘したRuddock and Wilkinsonの研究も注目に値すると指摘している<sup>16)</sup>。常に学生が入学し卒業していく組織である大学が、この事実を認識することは重要である。こうしたことから、大学での学習の準備段階としての高校の役割は何か、大学が学生の目標達成のために今まで以上にできる支援は何か、という問題を考える必要がある。

Eriksen and Stormmerによれば、学生が移行期において達成すべき適応には、変化についていくこと、新しい学習の方法に慣れること、クラスの学力の違いを受け入れること、時間の管理をすること、社会的に適応することといったものがある。また、学生は一人では移行期を乗り切ることができず、聡明で協力的な教員の支援が必要である。

学生へのきめ細かい対応と学習面での成功を進めるには、大学側が未充足のサービスに気づく努力、学習面では早い段階の成功体験の重要性を理解し、加えて大学の環境が新入生(特に女性、マイノリティ、社会人の新入生)にとって適応しにくい環境であることを認識しなければならない。新入生の実態を見ている教員は、そうした環境改善を進めやすい立場にあり、学生が初年次で獲得すべき課題に集中できるようサポートすべきである<sup>17)</sup>。

一方で、Crosling and Webb(オーストラリア・モナシュ大学)のように、移行期の学生に必要な支援は、社会面、学習面、構造面の3つであるという主張もある<sup>18)</sup>。90年代に入って生活様式の多様化が進むと共に、高等教育の大衆化は進学者の量的拡大とともに学生像の多様化をもたらした。こうしたある意味で非伝統的な学生の特徴には、25歳以上の成人学生、パートタイム学生、女子学生、地方出身の学生、英語を母国語としないマイノリティ出身の学生、留学生、障害を持った学生、高等教育第一世代といったものがある<sup>19)</sup>。Crosling and Webbも、移行期の問題の難しさを指摘したEriksen and Stormmerの見解を支持しながら、多様な層が混在する今日の大学では、その学習文化やそれを支える学問的期待、前提条件が中等教育までのものとは大きく異なってきており、結果として全ての学生にとって移行が困難であることを指摘している<sup>20)</sup>。

移行期における学習は、全ての学生にとって難しいものである。この時期の学生の学習活動と仲間づくりを支援すれば、大学・学部・教

員を身近に感じられるようになるだろう。また、学生は大学の組織形態、授業の進み方についても理解し、学習者としての自立が期待されていることを認識する必要がある。学生はこの時期に、大学での目標を明確にできるような支援と、専攻を希望する分野の研究水準についてある程度知っておく必要がある<sup>21)</sup>。

McInnis, James and Hartly(メルボルン大学高等教育研究センター)は、99年にオーストラリアの初年次学生調査を行い、94年に行われた同様の調査結果との比較を行いながら、約63%の学生が初年次の生活に満足しているという結果を示した。さらに、以下のような結果を示している<sup>22)</sup>。

- ・学生の進学動機には大きな変化はなく、将来の職業希望に沿った専攻を選んでいる
- ・事前情報との不整合性、学部選択の不適切性、学習時間が予想以上に求められることなどにより移行が困難な学生が一部いる
- ・高校から進学してきた学生の61%は、大学での学習準備のないままに入学してくるが、彼らのほとんどが大学での学習に適應している
- ・学生の満足度と動機づけの水準は、この間に若干下がっている
- ・正規課程の学生でアルバイトをしている者は9%、職業を持った学生は14%増加している

これまでに見てきた研究成果から、明らかにされた点をまとめると、以下の通りである。

- ・入学前の学生の所属に関わらず、大学の初年次は、それまでの生活様式から脱却し、新しい環境の中で適應し、自立し、独自の価値観を得るために必要な移行期間であること
- ・学生がスムーズな移行を行うには、十分な準備と継続的なサポートが必要であること
- ・学生が適應すべき領域には社会面の適應と学習面の適應がある
- ・学習面での移行では、自立した学習者になることと、学習のための時間管理を適切に行うことが特に重要であること
- ・アルバイトと学習を両立する学生が増加するにつれて、時間の点でも参加の点でも従来とは異なった課題がもたらされている。
- ・教員は移行期の特性、高校期から引きずる学習習慣、学生が大学生生活に抱く希望について十分に理解し、正確な情報の提供、専門的な学習への

適応、大学での学び方の指導を通じた支援をするべきである。

- ・大学は全ての学生が高い期待を維持できるようにするだけでなく、彼らの潜在的な要望に気づき、現代に特有であり多様化の進んだ学生に対して、特に初年次の時期に支援を行なうべきである。

### 3 . 移行期における学生への提言

これまでに見てきた先行研究をもとに、ここでは移行期における学生に対して可能な提言に関する検討を試みる。本稿では、ウェブ上で入手できる新入生向けの提言を300サイトから収集した<sup>23)</sup>。中でも多数提供されているのが、教員から学生への提言であり、大学の公式サイト上でオリエンテーション教材の一部として提供されている。提言の内容は、履修計画、キャンパス情報や規則正しい生活を送るための知識から、学習方法のヒントまで及ぶ。以下ではこれらの提言を収集・整理して考察する。

#### 3.1 教員から新入生への提言

表1は、教員から新入生への提言のうち、頻出する上位20項目を示したものである。

これらの提言は、時間管理、重要事項の把握、学習習慣、大学での居場所探し、仲間作り、生活の知恵の6つの領域にわけられる。

多くの教員は、高校から大学へ進学してきた学生にとって、時間管理は最も重要なスキルであると考えている。中でも多くの提言で言及されることは、長期的な計画、一週間単位での計画、そして日々の計画といった、さまざま種類の予定を組むことの難しさである。また、高校時代と比べて大学の学習では授業の前後が重要であること、時間をより効果的に使う必要性にも触れている。

また、重要な情報についてきちんと調べておくべきであると指摘する。表1の中でよく見られる項目には、各大学が定める行動規範ともいえるべき規定・規則がある。すなわち、学生が知っておくべきこととしての、入学に関する規則、撤回の期限、履修や進級の要件、剽窃・単位認定・卒業認定に関する規則であり、各授業のシラバスに書かれる出席要件、必読文献、課題と提出期限である。また、学生は指定されたテキスト、キャンパスとキャンパス内の施設についても精通すべきである。

表1 教員から新入生へのアドバイス上位20項目

順位	ア ド バ イ ス の 内 容	言及される割合(%)
1	計画と時間の管理	95
2	大学での居場所を見つける	72
3	教員・アドバイザー・カウンセラーを知る	68
4	学習習慣を身につける	68
5	授業の目標、履修要件、単位認定の要件を知る	53
6	学内の組織・施設を知り、健康で規則正しい生活を送る	38
7	何事にも常に備える	33
8	困ったときは迷わず相談する	32
9	勉強は仲間と一緒にやる	30
10	積極的な姿勢を持つ	27
11	目的意識を持って学習環境を作る	25
12	授業に出席する	23
13	社交的な催しに参加する	23
14	授業に能動的に参加する	20
15	お金の管理の計画的な使用	20
16	在学中の目標を定める	20
17	新生活への準備	15
18	他者の話を能動的に聞く	15
19	目的に合わせて柔軟に計画する	13
20	目標を達成した時の自分を描く	13

さらに、居場所を見つけるために大学が提供する機会を積極的に活用することを勧めている。オリエンテーションに参加することで、キャンパスの情報や大学の理念、目標、規則などがわかり、教員や他の学生と知り合いになることができる。授業に出席し、専門へ進むと学会や専門団体にも入るようになる。大学や各学部の主催する企画に参加することは、特定の領域における学習コミュニティの一員になることを意味する。

教員と知り合いになることは、単に学習支援が得られるというよりも、学習への参加態度を示しながら所属意識を持ち、将来のネットワークを作るという意味で重要である。また、他の学生と知り合いになることも別の意味で重要である。同級生は、大学生活を共にする友人というよりも、学習上の困難に直面する際に支援を得られる学習のパートナーだからである。

学習習慣に関する提言も豊富である<sup>24)</sup>。ここでは、授業の準備、授業への参加、ノートの取り方、学習時間に限定して取り上げる。

まず、大学から情報を受けとったらすぐに行動に移し、準備に十分な時間をかけることである。これは、配られた書類を注意深く読む、関連する教材を用意する、テキストを読むといった活動に時間を取るためには重要なことである。大学では、授業のノートを見直す、新たに扱う内容をあらかじめ概観する、宿題を完全に終える、次回の授業で使うものをまとめておくといった活動の予定を組むことも準備に含まれる。

ノートや配布物の管理方法も、時間を有効に管理し、情報を素早く取り出すために重要なノウハウである。

また学期中は、単に内容を聞く以外にも、授業計画や内容の変更の確認、授業内容に興味を示して参加し、学習コミュニティの一員になるために、まずは授業に出席することが重要である。それと同時に時間を守ること、注意深く話を聞く態度、積極的に参加する態度も重要である。また、簡潔にノートを取る練習は、授業中、自習中を問わずに練習してスキルを磨く必要がある。

通常、一時間の授業には二時間の授業外学習を前提にしている。学習時間を効果的に使うには、好きな学習スタイルや効果的な学習方法を知ること、またこれに関連して学習環境を整えることが重要である。明るく、適温で、文献へのアクセスも容易な静かな場所を見つけ、学習の妨げのないところを選ぶべきだろう。同じ分野に興味を持つ友達同士で勉強会を開き、お互いに信頼しサポートし合える関係を作ることも推奨されている。これは学習面だけでなく生活面でも重要である。

生活面のスキルに関する提言も、変化への適応、自分で決めたことに責任を持つこと、お金の管理、健康的な生活の維持、ストレスへの対応、前向きな気持ちを維持することといった領域に分けられる。提言の多くは、自由な生活に伴って生じる責任に関するものである。学生は生活の中でさまざまな選択の場面に直面すると思われるが、安全で分別のある選択ができるよう計画力を高める必要がある。

### 3.2 新入生担当教員への提言

学習習慣を磨き自立した学習者になることは、学生自身の努力によっても可能だが、教員も学生の学習を促進するように、授業改善に努め、成人教育の原理に精通するべきである。こうした点を多くの提言者が強調している。

この点について最も著名な提言集が、Povlaç(ネブラスカ大学リンカー

ン校)による「授業開始後3週間までの教授法」(101 things you can do in the first three weeks of class)である<sup>25)</sup>。この文献には、学生の移行支援、授業中の集中力維持、授業への参加促進、学習支援、主体的な学習の支援、クラス内の仲間作り、学生からのフィードバックに関するノウハウが収められている。以下はそれらのうち、初年次学生に対して提供するものとして適したノウハウの一部である。

- ・大規模クラスや孤独な状況における学習の進め方を示す
- ・授業開始時に学生の質問や関心を引き出して黒板に書きとめ、授業中にこたえる
- ・学生に授業に臨む意気込みや獲得したい目標を書かせる
- ・授業内容について教員自身が持っている熱意や関心を学生に示す
- ・授業内容を理解するために必要となる学習時間を示す
- ・問題集や学習の手引きを作成して配布する
- ・毎回の授業終了時にその日の内容に関する小テストやコメントを書かせる
- ・授業時間外に共に勉強するグループを作る
- ・成績評価の対象となる試験の実施前に十分な練習・演習の機会を与える

これと同様にジェファーソン・コミュニティカレッジでも同様のノウハウを提供している<sup>26)</sup>。ここで取り上げられているノウハウは、教員と学生の間での相互作用、授業運営、学生中心の学習観、教師中心の学習観などであり、その一部を示すと以下の通りである。

- ・授業を通じて獲得したい目標とそのためになどどのような学習を行うかを設定させる
- ・初回の授業で授業の目標を示し、各学生のキャリア形成に授業の内容がふさわしいか話し合う
- ・話をするときや質問を受け答えするときは教室内を巡回するように歩く
- ・テスト・レポートなどはできる限り早く返却する
- ・学期中の適当な時期に全受講生と面談する
- ・学生が履修している他の授業の担当教員と打ち合わせを行う

Hauger(アイオワ州立大学)は、18歳から25歳程度の学生を対象とした学生の発達論をまとめている<sup>27)</sup>。Chikeringの研究<sup>28)</sup>を引用した上で、初

年次の発達段階では学力の発達も重要だが、感情のコントロールと自律性の発達が重要であるとHaugenは指摘する。また発達論に基づき、初年次生に見られる実態について述べたWidick、Knefelkamp、Parkerの研究において考案された一覧表も活用している。これらは一つのトピックについてわずか2、3の概念で説明できるものである。つまり、構造化されたプロセスの必要性、経験を持つ必要性、理論が抽象的であるより分析的であることである<sup>29)</sup>。この分野に関しては他にも文献があり、教員が学生の発達段階にあわせて対応し、移行期の経験を有意義なものにするためにも参照されたい。

Mencke(アリゾナ大学)は、教員による学生の実態把握の支援に用いる文献で示した初年次学生の学習スキルをまとめ、アリゾナ大学の実態調査との比較を行っている<sup>30)</sup>。Menckeによれば、学生に決定的に欠けているスキルは、時間管理、大人数授業の学習法、テキストなど長文を読む力、試験へ向けた準備、学習内容の批判的検討などである。学生支援を行う教員への含意としてMenckeの示した研究をまとめると、次の通りである。

- ・学生の学習習慣と短期の時間管理能力が高いほどGPA(grade point average)も高い。一部の学生は自ら計画を立てて実行でき、Britton and Tessorが成功要因と指摘している短期の時間管理法を実践している
- ・大人数クラスでの学習は困難になりがちであることを多くの研究で指摘されている。この点に関して、学生は授業のはじめの15分で学習内容の41%が理解できるが、45分では20%にまで下がることを示した研究が有名である。このとき、多くの学生は受動的な学習者となっており、どのようにノートを取ればよいかもわかっていない
- ・学習センターのスタッフが見たところでは、新入生の三分の二が大部なテキストを使った学習経験がなく、75%の学生は一冊のテキストのみを用いて学習している。すなわち、Peterson(1992)の研究で示された事実にも関わらず、授業内容の理解や記憶の保持が実際に阻害されている可能性がある
- ・試験の準備は詰め込み型の勉強である傾向がある。新入生で理解と批判を往復しながら進める勉強法を行っているものは少数である
- ・自由かつ科学的な問いを立てて問題に取り組むように初年次生を指導すると、うまくいかないこともある。こうした事態の背景には、初年次生の多くに、受動的で学習内容ではなく成績が本位の学習習慣を持っている

ることが指摘できる

以上から、Menckelは次のようにまとめている。今のところ、初年次生に認知的なスキルの獲得支援はうまくいっておらず、初年次生に対して、テキストの中で何が重要でどのように考えればよいのか、あるいは複雑な内容を概念図にまとめるための方法論を示していないのである。

こうした問題に対してHaugenは、学生主体のシラバスを開発するための教員研修教材を開発している<sup>31)</sup>。そのコンセプトは、次の通りである。

コンセプトは単純であるが、その意味は深い。学生および彼らの学ぶ力は、我々教師が何を行うかに左右される。よって教員は学習内容よりも学習プロセスを重視しなければならない。つまり、学生を授業内容に適応させるのではなく、授業内容を学生にあわせるべきである。そして学習の責任は教える教師ではなく、学ぶ学生におかれるべきである。

Haugenによれば、教員はまず同僚となぜ、何を、だれに、どのように教えるのかを話し合うといった、熟慮を重ねた準備から始めるべきであるという。その際には学生の発達段階に関する考察、および自立し、批判的に考えられる学習者として育てるため、教員中心から学生中心の学習への転換が必要となる。教員には多様な教授法の活用、主体的な学習の支援、グループ討論の機会提供、問題解決型学習の採用と、学生を知り、彼らを支援することが期待されるのである。

Tintoは、初年次学生の社会的、認知的発達を支援する方法として学習コミュニティの有効性を提唱している<sup>32)</sup>。学習コミュニティは、同じ授業の履修、授業中のディスカッションやグループ活動の場を設定する中で形成されるものである。その目的は、全体的な学習と進度にばらつきがないようにするためであり、徹底した学習と批判的な思考を訓練する場を作ることでもある。

学習コミュニティでの経験としては、次の2点が重要である。一つはShared Learningであり、複数のクラスの学生をコミュニティのメンバーとして、早い段階で知り合いになり、親密な関係を築くことで、学習経験の一部とすることである。もう一つがConnected Learning

であり、一つのテーマないし学問領域で共通の授業を用意し、授業間の連携を密にしながら初年次教育の均質化を意図するものである<sup>33)</sup>。

これまで見てきたもの以外にも、有益な教員向けノウハウを提供しているサイトが多数存在する。マサチューセッツ州立大学アマースト校が提供する「教授法を学ぶ10の文献」(Ten Best Articles on Teaching and Learning)<sup>34)</sup>、東ケンタッキー大学が提供するノウハウとそれらに関連するリンク集<sup>35)</sup>、全米教育フォーラム(National Teaching and Learning Forum)と題されるサイトによる解説、事例紹介、ノウハウ集なども参照されたい<sup>36)</sup>。

### 3.3 大学執行部向けの提言

学生の入学時の体験・印象は重要であるため、学生サービス部門には利用しやすく、積極的な対応が求められる。米国では学生の不満足要因として重要なものを抽出する研究、「学生サービス遅延について」(Getting the service run-around)<sup>37)</sup>がある。サービス遅延は、学生からの問い合わせが迅速かつ適切に行われず、学生が不正確な情報やアドバイスを受けてしまい、最悪のケースでは問い合わせそのものが無視されてしまうことをいう。ノエルレビッツ社(Noel-Levitz)がまとめたレポートによれば、こうした現象が見られることには、単一の原因というよりも以下のような様々な問題の兆候と見るべきであると指摘している<sup>38)</sup>。

- ・職員が大学の組織、方針、規則などを熟知していない
- ・職員が忙しすぎる
- ・職員が問い合わせのあった問題に関する責任を持っていない
- ・職員が他の部署が持つ情報へのアクセスが容易でない
- ・組織構成が学生の生活実態に沿う形ではなく組織の都合で構成されている
- ・職員に解決を試みる権限が与えられていない

他の研究でも、学習上の指導の質と学生・大学サービス部門のミスマッチに関する問題が指摘されている<sup>39)</sup>。オーストラリアにおいても、コース選択を誤り、非現実的な目標設定を引き起こしてしまう要因として、入学時の不正確な情報提供があると初年次教育の研究で指摘されている<sup>40)</sup>。これらの研究では、以下のような改善の必要性を指摘している。

- ・大学側から入学前に正確な情報提供の徹底

- ・高校との連携の緊密化
- ・学生の志望が変わった際の、履修計画変更への柔軟な対応
- ・入学前の学習準備セミナー・学習支援の提供
- ・全学的な目標の明確化
- ・学生サービス部門を中心に職員の資質向上

Lowは大学当局が学生サービスの向上を進めるための6つのステップを示している<sup>41)</sup>。その内容は次の通りであり、高校から大学への移行促進に適用しやすいものである。

- 1．準備：まず全学でサービス向上を共有し理解するところから始める
- 2．目標の設定：教員、職員、執行部、学生に関するデータを慎重に吟味する
- 3．計画の策定：新たなプログラムを立ち上げるのではなく、現行のサービス・プログラムの中でサービス向上の実践をすすめる
- 4．評価方法：計画を定めた後、各部署で成果指標を設定する
- 5．実施：学内資源や時間的な観点から現実的な実施計画を立てて進める
- 6．表彰：高い成果を収めた部署はその功績を表彰する

#### 4．おわりに

以上概観してきたように、研究論文から得られる移行期に関する研究成果とウェブから得られる教員からの提言は整合的であるといえる。

本稿が検討した300のサイトは、いずれも研究論文の知見を反映したものであった。そこでは、初年次は学生の移行において重要な時期と考えられており、そのノウハウからは社会的・学問的な面における支援の必要性がうかがえた。そして、学生に移行の過程で求められる発達内容を示すとともに、教員と大学に対して学生の移行を支援する方策を提供している。

ノウハウでは概して学生が新しい環境に適應するための方法論を強調している。中でも時間の効果的な管理の方法が最も重要な点として強調されている。同時に、学内に居場所を見つけ、教員や同級生と面識を持つこと、学内の施設・サービス、学則、教育目標、履修要件に精通することも重要な点として強調されている。また、健康管理、生活安全、アルバイト、お

金の管理、将来設計などの面における意思決定も自立性と責任感を高める上で重要である。さらには、授業中、文献の精読、個人学習、グループ学習、試験などの場面で必要とされる学習スキルを身につけることも重要な点として強調されている。

教員は学生の移行過程全般において支援者となれることを多くの文献は示唆している。また、学生の発達過程の理解のためにも教員はそれらに関連する理論的枠組みについても知っておく必要があること、および、重要なスキルを明示的に教え、一体感を形成するために教授法を磨く必要があることも示唆している。

提供されているノウハウの多くは特定の学習スキルであるものの、それらは先行する理論的研究の知見に基づくものであるという点で重要である。学習スキルの向上が学生が抱える問題を全て解決するわけではなく、新しい環境への適応を通じて学習面の発達を促すだけであろう。学習スキルは学生がそれを求める際に提供されることが重要である。また、学生側はスキルの実践に関する支援を受け、学問領域の間にある慣例の違いを理解する必要がある。

Tintoが示した枠組みのように、自立し、移行を通じて、適応を進めるためには、多くの文献で示されているように、移行が消極的な取組であってはならない<sup>42)</sup>。移行を完遂するためには、全ての関係者がそれぞれの役割とお互いの責務を共有しながら、主体的かつ相互に関わり合わなければならない。学生は新たな環境に適応する努力を重ねなければならない。教員および大学執行部は、移行期の学生の特徴を把握し、大学組織、教授法、支援体制の向上に努めなければならないのである。

## 注

- 1) <http://students.sfu.ca/makingthegrade/headout2.html>, p.1.
- 2) Tinto, V.(1998)“ Stages of Student Departure,”*Journal of Higher Education* 59(4), pp 438-453 .
- 3) Tinto, V.(1975)“ Dropout from Higher Education: A Theoretical Synthesis of Recent Research” *Review of Educational research* 45 , pp 89-123 .
- 4) Tinto, V.(2002)“ Promoting Student Retention: Lessons Learned from the United States” Paper presented at the 11th Annual Confer-

- ence of the European Access Network, Prato, Italy. June 19 , p 4 .
- 5 ) Tinto, V.(2004a)“ Rethinking the First Year of College ” in <http://soeweb.syr.edu/Faculty/Vtinto>, p 4 .
  - 6 ) Tinto , Op.cit., ( 2002 )
  - 7 ) Tinto, V.(2004b)“ Learning Better Together: The Impact of Learning Communities on Student Success ” in <http://soeweb.syr.edu/Faculty/Vtinto>, p .1
  - 8 ) Draper, S (2003)“ Tinto's Model of Student Retention ” in <http://www.psy.gla.ac.uk/~steve/localed/tinto.html>
  - 9 ) 例えば、Braxton, J. M (2002) Reworking the student departure puzzle. Vanderbilt University Press、Thomas(2002)“ Student Retention in Higher Education: The Role of Institutional Habitus ”Journal of Educational Policy 17(4) pp 423-432、Bourdieu P. & Passeron, J (1977) Reproduction in Education, Society and Culture. London: Sageなどを参照されたい。
  - 10) Draper, 2003 ,p 5 .
  - 11) Draper, 2003 ,p .12 .
  - 12) Eriksen, B. and Strommer, D (1991)Teaching College Freshmen. San Francisco: Jossey Bass.
  - 13) Eriksen and Strommer ,1991 ,p 4 .
  - 14) Eriksen and Strommer ,1991 ,pp .13 - 14 .
  - 15) Eriksen and Strommer ,1991 ,p .19
  - 16) Ruddock, M. and Wilkinson, C (1983)“ Retention-What happens during the Freshman Year? ”Paper presented at the 23rd Annual Forum of the Association for Institutional Research, Toronto, Canada. May.
  - 17) Eriksen and Strommer ,1991 ,p 45 .
  - 18) Crosling ,G and Webb, G (2002)Supporting Student Learning. London: Kogan Page.
  - 19) Crosling and Webb ,2002 ,p 2 .
  - 20) Crosling and Webb ,2002 ,p 3 .
  - 21) Crosling and Webb ,2002 ,p 6 .
  - 22) McInnis, C., James, R., and Hartley, R (2000) *Trends in the First Year Experience in Australian Universities*. Canberra: Department of Education, Training and Youth Affairs.
  - 23) サーチエンジンGoogleを用いて、transition to university、tips for freshmen、first year university、new undergraduate students、study tips for students、freshersという検索語を用いた結果である。これらの検索語から見つかるウェブサイトは、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、

ニュージーランドで提供されているアドバイスであるが、ここでは新入生向けのアドバイスに特化した300のサイトを抜粋した。

24) 以下は、これらに関するウェブサイトの一部である。

<http://venus.atlantic.edu/~capc2002/keys.htm>

<http://web.grcc.edu/biosci/studyski/forbstud.html>

<http://www.ucc.vt.edu/stdysk/stdyhlp.html>

<http://www.dushkin.com/online/study/studymain.mhtml>

<http://www.ccis.edu/departments/writingcentre/studyskills.html>

<http://www.wou.edu/provost/aalc/learning/studyskills.html>

<http://www.adprima.com/studyout.htm>

<http://www.uni.edu/walsh/linda7.html>

25) 全文は以下のサイトで提供されている。

<http://www.honolulu.hawaii.edu/intranet/committees/FacDevCom/guidebk/teachtip/101thing.htm>

26) ジェファーソン・コミュニティカレッジによる「学生の学習継続支援のための教授法」は、以下のサイトで提供されている。

<http://www.honolulu.hawaii.edu/intranet/committees/FacDevCom/guidebk/teachtip/studretn.htm>

27) Haugen (1998a) <http://www.celt.iastate.edu/tips/studdev.html>

28) Chikering, W (1969) *Education and Identity*. San Francisco: Jossey-Bass.

29) Widick, C. Knefelkamp, L. L., and Parker, C. A (1975) "The counselor as a developmental instructor" *Counselor Education and Supervision*, 14, pp 286-296.

30) Mencke, R. [http://pandora.cii.wvu.edu/casto/what\\_freshmen.htm](http://pandora.cii.wvu.edu/casto/what_freshmen.htm) pp. 1-2.

31) Haugen, L (1998b) <http://www.celt.iastate.edu/tips/syllabi.html>, p.1.

32) Tinto, V (2002 ; 2004a)

33) Tinto, 2004a, pp 5-6.

34) [http://www.umass.edu/cft/resources/ten\\_best\\_articles.htm](http://www.umass.edu/cft/resources/ten_best_articles.htm)

35) <http://www.tlc.eku.edu/tips.htm>

36) <http://www.ntlf.com/html/lib/bib/bib.htm>

37) 37. Noel-Levitz (2003). How students rate the quality service climate on campuses. <http://www.noellevtiz.com/>

38)

39) Low, L (2000a). *Are college students satisfied? A national analysis of changing expectations*. Noel-Levitz Inc.

40) McInnis, C., James, R., and Hartley, R (2000).

- 41) Low, L ( 2000b ).6 steps to successful retention planning.  
<http://www.noellewitz.com/>
- 42) Tinto, V ( 1988 )